21世紀に生きる人間の教育

―自己教育力の育成―

河　野　重　男

はじめに
1.　教育改革の基本的な考え方
2.　中央教育審議会の中間報告について
3.　21世紀に生きる人間の育成
4.　変化に対して主体的に生きる人間の育成
5.　生涯教育について
まとめ

はじめに

おはようございます。ご紹介いただきました河野でございます。教育の問題がいろいろと難しいことに直面している今日ですが、そうした中で、ここでの非常に充実した研修生活を積まれまして、また来学期からの教育実践に備えていらっしゃるという先生方に、大変おこがましいですが、初めに心から敬意を表させていただきます。

教育改革のきっかけ　最近、ご承知のように、教育改革ということで、非常

に大きな関心が集められております。ついせんだって、臨時教育審議会で第一次答申が発表されました。ご熱心な先生方ですから、おそらく、ほとんどの先生方が今回出されました第一次答申については十分にお読みいただいていることと思います。その第一次答申についても、あるいは、ここでの研修生活の中でも、またいろいろとお考えいただいたり、お互いに批判をしていただいたりしていることと思います。今回の臨時教育審議会がつくられ、教育改革ということに大きな関心が向けられるようになりましたのも、なんといっても一番大きなきっかけは、ご承知のような、家庭内暴力とか、校内暴力、あるいは登校拒否、そして最近になって出てきております「いじめ」の問題、一口にいって教育の荒廃、これをどう克服していくかということが、直接の大きなきっかけでございました。

教育の量的拡大から質的充実へ　しかし、これもご承知のように、今日の教育改革は、ひとり我が国だけのことではございませんで、世界の各国が教育改革に大きな取り組みをしているところでございます。そして、こうした世界的な教育改革を目指す流れの中に共通していると思われますのは、なんといっても世界各国で、我が国と同じように子供達をめぐるさまざまな問題が出てきているということです。これが一つの大きなきっかけになっていると思うんですが、大きな特質として言えるのは、「教育の量的拡大から質的な充実へ」というふうな転換をはかっていかなければならないこと、これが各国が当面している一つの大きな課題になっているように思われます。

ご承知のように、我が国でも1960年代に「教育爆発の時代」ということがしきりに言われました。おそらく1960年代に、いろんな所で研修会などに参加された先生方はご承知のことが多かろうと思います。「教育爆発の時代」というようなテーマで、講演などもしきりにもたれました。ご承知の方が多いと思いますが、このモラロジー研究所に随分寄与されました、亡くなられました平塚益徳先生が「教育爆発の時代」ということで、各地で講演されました記録などを拝見したことがございます。

それが1970年代に入って、直接的には、世界各国がやはり当面しましたオ

イルショック、経済的な行き詰まりということがありまして、教育は量的には拡大しきった。これからは質の充実ということへ転換していかなくてはならないということになってきました。一方で、世界各国とも経済的なさまざまな困難な問題に直面している。特に、我が国はまだそれほどではありませんが、アメリカ、イギリス、どこの国をとってみましても、若年失業者の問題に大きな悩みを抱えております。そうした失業問題ということにも象徴されますように、さまざまな経済的な行き詰まりということにも関係しながら、質の充実という方向へ転換をしていかなくてはならない。これが一つ言えるように思います。

21世紀に向けての教育　しかし、一方で、これもまた世界各国とも当面している問題ですが、21世紀に向けての教育のあり方を探求していかなければならない。つまり、片方で、この現状に冷静に取り組みながら、他方で、21世紀への教育を目指した教育のあり方を探求していかなくてはならない。これが世界各国とも当面している、教育改革をめぐる大きな課題であるように思います。我が国の教育改革として臨時教育審議会がつくられましたのも、またそういうところに背景を求めることができるように思うのです。

臨時教育審議会の設置　さて、今回、臨時教育審議会で、先程から申しております校内暴力問題だとか、いじめの問題、青少年非行の問題、あるいは偏差値による教育の問題、さまざまな問題、現状をどう克服し解決していくかということを考えながら、一方で、21世紀の教育のあり方を探求すること、これが臨時教育審議会がつくられた大きな原因だったと思います。今回、臨時教育審議会で、そういう教育改革についての基本的な考え方を、第一次答申で打ち出しております。これについては、もう十分お読みいただいていることと思います。

1.　教育改革の基本的な考え方

これからの教育改革を、どういう基本的な考え方の上に立って考えていく

のかという点について、第一次答申では、八つの原則を挙げております。（補注、個性重視の原則、基礎・基本の重視、創造性・考える力・表現力の育成、選択の機会の拡大、教育環境の人間化、生涯学習体系への移行、国際化への対応、情報化への対応。）

個性重視の原則　第一に、個性重視の原則ということを打ち出しています。この八つの中でも、これからの教育改革を考えていく上では、とりわけ大事に考えていくという方向で打ち出しております。そして、この個性重視の考え方については、一般的には、「個性尊重」とも言われます。このことは教育基本法にはっきりと明示してあるので、改めて言うまでもないことだというふうにもいわれます。しかし、この問題をめぐって、新聞とかテレビ、マスコミなどで大きく取り上げられて、先生方がいちばん関心を持たれましたのは、「教育の自由化論」であったのではないかというふうに思います。この考え方は今回の臨時教育審議会がつくられた初めから、委員の中から打ち出されまして、かなり極端な自由化論の提唱もございました。学校の設置認可はもう自由にしていいんではないか、そうして学校はほとんど民営化していいんじゃないか、と。中曽根さんも見学に行ったようですが、塾などに行ってみると、学校よりは生徒の目が輝いている。見ただけでも立派な授業が塾で行なわれている。そんなら塾も学校として認めていいんではないか、と。また小・中学校の義務教育段階でも、「学校選択の自由」ということを考えたらよかろう。そうすれば、良い先生のおられる学校には生徒がたくさん行くようになって、困った先生のおられる学校には、誰も行かなくなって潰れてしまう。それでもよいのではないか。こういうふうな、かなり極端な自由化論も展開されました。

私自身は、臨時教育審議会では、第三部会に所属しています。ここは初等・中等教育の改革の問題を取り扱う部会でございますが、この第三部会では、そうした自由化という考え方については、それでは現実に塾を学校にしてしまうということが起きた時に、どういう混乱が現場に引き起こされてくるか。とりわけ学校を自由に選択できるようにするため、学区というものも

取っ払ってしまった場合に、現実にどういう問題が起きてくるのか。この結果はもう目に見えています。そういう点から言えば、第三部会としては、教育の自由化に関して、少なくとも義務教育に関する限りは賛成できない、ということになりました。マスコミはそういうところを大きく取り上げるものですから、第一部会と第三部会の対立ということで、大きく新聞等でも取り上げられました。結局、義務教育段階では、自由化という考え方はなじまない。大学・高校教育について自由化を主張するのは、これは大いに結構だし、よく分かるので、この方は自由化をこれからどしどし進めていかなくてはならないだろう。けれども、義務教育については慎重であるべきだというふうな共通理解に達しまして、自由化という考え方は引っ込みました。新聞等では、これを取り上げて、第一部会と第三部会で手打ち式が行なわれたと書いたのもございました。

これに代って出てきたのが、「個性主義」という考え方でございました。これもまた、新聞等で大きな見出しで取り上げられました。これまでの教育はあまりにも画一主義の教育になりがちであった。これからは、これを個性主義という方向に転換していくべきである。これを今回の教育改革の理念に据えようというふうな考え方でございました。あまりにも画一的だった、これまでの教育を方向転換して、「個性主義」という方向へということならば話しは分かるということで、これは共通理解に達したわけです。ですが、それにしても実際にいろいろと意見をうかがってみますと、個性主義という言葉では、やはり親たちや先生方には分からない。自分がこれこそ大事だと思うことについて、自分から「……主義」というふうに銘打ったことは、いまだかつてない。まあ、あるとすれば「民主主義」ぐらいのものだろう。マルクスだって、自分の考え方をこれは大事だということで、自らマルクス主義というふうに自分で名をつけたことはない。もっと分り易い言葉にしようということで最終的に落ち着いたのが、「個性重視の原則」という理念であったわけです。

その他の重点項目　これに続いて、「基礎・基本を徹底する」。さらには、

「創造性・考える力・表現力の育成」ということを、教育改革の理念にしていこう。また、これはこれからいろいろな形で問題になってくることと思われますが、私なりに非常に重要な点を指摘したと思われますのは、「教育環境の人間化」ということを打ち出した点であります。「ふれあいの心」「ふれあいの教育」ということを推進することが、なによりもこれからの教育改革の方向だ、と。これを家庭教育、学校教育、社会教育、この全体を通じて考えていこう、というのです。こういうことが、端的に「教育環境の人間化」ということであるように思われます。

こうした四つの原則を考える時に、これと縦軸―横軸の関係で捉えられるものが、次の三項目であるように思います。つまり、一方で、個性を重視し、基礎・基本に徹し、創造性と考える力の育成を大事にしながら、かつ教育環境の人間化ということを考えていく時に、他方で、「生涯学習の社会」を実現していくんだという考え方をもつ。これを縦軸と横軸の関係で捉えていこうというわけです。

また、教育の情報化、情報化社会への傾向が増大している中で、個性重視の考え方とか、あるいは、基礎・基本の徹底というようなことを考えていくべきです。さらには、「教育の国際化」はもっと進むであろうというふうな点から、創造性と考える力の育成だとか、あるいは、教育環境の人間化だとか、そういうことを具体的な問題として考え、その解決に向かっていこう。これが今回、臨時教育審議会の第一次答申で打ち出された教育改革の基本的な考え方であるように思います。

第一次答申では、必ずしも、こうした縦軸―横軸の関係で整理しておりませんので、新聞等では、「なんだ、羅列的に挙げられておるだけではないか」と、その打ち出されている一つ一つが相互にどういう関連をもっているのかという、いわば構造が明確にされてないというふうな批判を受けております。これはおそらく先生方お一人お一人の教育哲学として、この八つの考え方を相互に関連づけていかれる問題だというふうに思います。私の場合には、いま申し上げましたように、縦軸―横軸の関係で整理して、これを捉え

ることができるように思うわけです。

2. 中央教育審議会の中間報告について

そう考えていきますと、すぐに思いおこしていただけることがあると思うのです。中央教育審議会は「これからの我が国における社会の変化に対応する教育内容のあり方について」という諮問をうけて、2年間かけて、それに取り組んで検討してまいりました。その結果を中間報告という形で、これは審議経過報告と言われておりますが、一昨年の11月に発表して世に問いました。そして、これについてさまざまな方面からのご意見をうかがって、さらに2年間かけて検討して、これを中教審の答申として出しました。それをもとにして教育課程審議会がつくられ、検討されて、学習指導要領の改定という手順で考えられていたものでございます。

ところが、この審議経過報告が発表されました、ちょうど同じ時期から、中曽根総理が非常に大きな関心を教育改革に向けてまいりまして、文部省の中央教育審議会とは別に、政府の全体を挙げて取り組むという点から、臨時教育審議会がつくられ、その間、中央教育審議会は寝ていてよろしいということで、いま中央教育審議会は休眠中になっているものでございます。

4つの視点　一昨年11月に出しました審議経過報告について、その後休眠中で検討しておりませんので、これは一部では「幻の中教審答申」と言われているものでございますが、この審議経過報告も、新聞等でかなり大きくとりあげられました。その中で、これからの教育内容のあり方を考えていく上での基本的な視点として、四つのことを打ち出しました。これもすでにご承知のことかと思います。

これからの教育内容のあり方を考えていく。別の言葉に言い直せば、21世紀に生きていく人間の育成を考えながら、これからの教育内容のあり方をどのように考えていくか。第一に、自己教育力の育成ということを考えていこう。第二に、基礎・基本の徹底ということを強調していこう。第三に、創造

性と個性の伸長ということを考えていこう。そして、第四に、文化と伝統の尊重という原則を考えていこう。この四つの視点がございます。

文化と伝統の尊重　ここで少し付け加えますと、文化と伝統の尊重ということを打ち出しましたところ、新聞等は大きな見出しのところだけしか捉えない傾向がありますので、またナショナリズムの教育かというふうに大きな批判を受けました。しかし、小さい字で書いてありますところをよく読んでいただきますと、これは決してそういう意味で文化と伝統の尊重が打ち出されたわけではございません。21世紀の国際社会化された、そういう社会に生きていかなくてはならない日本人の育成をどう考えていくのか。これが非常に大事な視点です。

今日、外国で日本人がとかく評判が悪く、エコノミック・アニマルと言われている。外国で日本人がエコノミック・アニマルと評価される最大の原因は、海外に進出している人たちが、それぞれの国の、その社会の文化とか伝統を正しく理解し、正しく評価し、尊重するということに欠けているからであります。第一に、その土地の人々と溶け込まない。溶け込まないどころか、たとえば、特に発展途上国などでは、その国や社会のもっている文化とか伝統に対して、正しい理解をもつどころか、むしろ軽蔑の念をもっている。そういう人ほど、えてして日本の国の文化や伝統、そういうものを正しく理解し、評価し、尊重するということに欠けているのです。日本の文化について聞かれた時に、それを正しく説明することもできない。また、そういう人ほどえてして自分達の地域社会の文化とか伝統、これを正しく理解し、評価し、尊重するということに欠けているのです。これをなんとかしなくては国際社会に生きていく日本人ということにならないのではないか。こういう考え方で打ち出されたのが、「文化と伝統の尊重という原則」であったように思うのです。

そうしますと、一昨年の11月に、中央教育審議会が発表しました、これからの教育内容を考えていく上での基本的な視点と、今回の臨時教育審議会で出された教育改革を考えていく八つの原則は、項目の数こそ違いますが、相

互にまったく共通しているというふうに言うことができると思うのです。

現行教育課程の背景にある原則　もう一つ思い起こしていただけることがあると思います。それはすでに、今度新しく改定されて、正式の実施段階に入って、先生方の手によって、それぞれの学校で実践に移されている現行の教育課程改善の背景にあった原則でございます。先生方がすでに実践していただいている現行の教育課程の改善が図られた時に、その背景にある基本的な考え方は、改めて申し上げるまでもなく、三つございました。

第一に、人間性豊かな子供を育成していく、そういうことができるような学校にしていくんだと、これが第一の願いです。

第二に、ゆとりのある、しかも充実した学校生活を送っていくことができるようにする。ここでは主語が省略されておりますが、主語はもう明らかであります。一人一人の子供、あるいは生徒が、ゆとりのある、しかもとりわけ充実した学校生活を送っていくことができるような学校にしていく。

そして、第三に、国民として必要な基礎・基本ということを大事にしながら、個性や能力に応じた教育が展開されていくように、この三つが前項の教育課程の背景にあった基本的な考え方でございました。人間性豊かな子供の育成、一人一人が充実した学校生活を送ることができるような学校の創造、そして基礎・基本と個性・能力の違いに応じた教育。この三つでございます。

そうしますと、現行の教育課程の改善の背景にあった基本的な考え方と、一昨年の11月に出されました中央教育審議会の審議経過報告で出されている四つの視点、そして今回の臨時教育審議会の答申で打ち出されました八つの原則、これは相互にまったく共通している原則だということができると思うのです。その点から申しますと、現行の教育課程の改善の背景にあった基本的な考え方を、もう一度、初心に帰り、原点に戻って見直していって、現行の教育課程にもとづいて展開されている、それぞれの学校でのあり方を、そこにもう一度新しい光を当てて、そして現行の教育課程をさらに進化させ徹底していくことが、教育改革を推進していくことになっていくのではないか

というふうに思います。

不易の原則　教育の本質には、いつの時代でも、社会の変化ということがどんなに大きくかかわったとしても、変わることがない不易の原則というものがあるはずであります。これを改めて打ち出して見直したのが、今回の臨教審の第一次答申だということができると思います。そういう点からいえば、自由化論だとか個性主義論だとか、随分はなばなしい論議もありましたが、結局は戻るべき本質に戻り、そして落ち着くべきところへ落ち着いたというふうに見るのが、今回の第一次答申であるように思うわけです。私は今回の答申をそのように受け取って考えているわけです。

3.　21世紀に生きる人間の育成

さて、そういうふうに考えていきながら、いちばんはじめに申しました、教育が当面している現状をどのように解決し克服していくか。一方で、21世紀に生きていく人間の育成を考えて、この二つの視点をどう突き合わせて考えるか。とりわけ「21世紀に向けての人間の育成を目指して」という点に目を向けながら、次のように、ご一緒に考えていきたいと思うわけです。

21世紀に生きる人間の育成という問題は、先生方のそれぞれの学校経営要覧を見せていただきますと、随分、ほとんどといっていい学校が、これを目標として掲げています。これは先生方のそれぞれの学校経営要覧の学校経営目標や学校教育目標を思いおこしていただけると、ああそのとおりだ、とおっしゃると思います。もっとも、自分の学校の学校経営要覧の経営目標なんか見たこともない、という先生方もおられないわけではありませんが。

今回の臨時教育審議会のこれからの教育改革もまた「21世紀に生きる人間の育成を目指して」ということが、いわば合い言葉でございます。しかし、「21世紀に生きる人間の育成を目指して」というふうに、大きな字で書かれている学校経営目標のところに、どういう内容が展開されているか。これは学校によって、人によって違います。

高齢化社会への対応　ある人は、高齢化社会への傾向がもっともっと増大していくだろうから、高齢化社会への対応という点から、教育のあり方を論ずる人があります。ご承知のように、確かに、我が国は、現在、65歳以上の高齢者人口の占める割合がほぼ10パーセント近くであります。このような状態は、我が国がいまだかって経験したことがない非常に大きな変化であります。今の幼稚園の５、６歳の子供達が20歳になって社会を支えていかなければならん。私なんかも、そのお世話にならなければならん。その頃には、65歳以上の高齢者人口が20パーセント近くに達するであろう。こういうことが十分に予測されます。これはもう、これまでにわれわれがかつて経験したことのない、とてつもなく大きな変化であります。今の５、６歳の幼児が20歳になって社会を支えていく頃に、一人一人が肩に背負わなければならない社会の重みは、とてつもなく重いものになっていくだろう。

そういうような観点から、高齢化社会への対応ということを考えながら、21世紀に向けての教育をどう考えていくか。こういう形で論ずる人がございます。そこから、「思いやりの心」がなによりも大事になっていくのではないかというようなことを打ち出す人もございますし、あるいは学校教育でとりわけ大事なのは体力づくりだ、基礎的な体力を身につけることだという人もございます。人さまざまでございます。

情報化社会への対応　また情報化社会への対応という点から、21世紀の教育を論ずる人もございます。

おそらくここでの研修の中でも、そういうことは折りにふれて話の中で論じ合われたことの一つではなかろうかと思います。今日、秋葉原の電気屋街、安い電気屋さんが並んでいるところを御覧になればいいと思います。小・中学生がたくさん集まって、そこでパソコン、マイコン、そういうものを駆使しながらゲームにうち興じております。ワープロ、コンピューター、そういうものの発達を考えてみれば、21世紀は新しいニュー・メディアが人人の生活の隅々にまで浸透していくことになるだろう。その頃にいちばん大切なことは、コンピューター・アレルギーをおこさない人間、コンピュー

ターに振り回されない人間、しかもコンピューターとか、ニュー・メディアを使いこなしていくことができる人間、こういう人間の育成を考えていかなくてはならない。下手すると、この変化にいちばん追いつかないのは、学校の先生かもしれません。子供達はもうメカ（機器）に対する適応力は早いですから、すぐ使います。使いこなすとまでは言いませんが、使うことができます。

一方、学校はどうか。この間、カナダの校長さんが日本へ参りまして、日本の学校を視察して廻った。その帰りに「いちばん感じられたことは、どんなことでしょうか」などと誰かが聞いてみたそうです。そうしたら、カナダの校長さんたちが学校を見て廻っていちばんびっくりしたことは、次のようなことです。カナダでは、今日、パソコンぐらいは少なくともどの学校にも入っている。先生がそれを使いこなして、そして生徒がそのニュー・メディアを正しく使っていくことができるような、これを基礎として考えていくようになっている。日本はエレクトロニクス技術が随分と進んだ国だというふうに聞いてきた。第一、カナダの学校に入っているパソコンとか、そういうものの部品は日本のものが非常に多くなっている。さぞかしこれから見て廻る日本の学校では、パソコン、マイコンなどは、少なくとも学校に入っていて、それを子供が正しく使うことができるように、先生が使いこなして教えていることであろう、というふうな目で見て廻ったところ、少なくとも自分の見て廻った小学校に関する限り、パソコンやマイコンが入っている学校は一つもなかった。入った学校がないわけではないけれども、それはホコリを被っていた。これが日本の学校を見ていちばんびっくりしたこと、つまり日本の科学技術の発達と学校のそれに対する立ち遅れというような点が、いちばんびっくりした点だというのです。

もっとも、このニュー・メディアを学校でどのように導入して利用していくかということについては、いろんな論争がございます。先生方、ご承知のところでございます。しかし、この論争も下手すると、人間の屁理屈に使われている面もあります。だいいち、いまさら自分で勉強してニュー・メディ

アを使いこなして、これを生徒の教育に正しく活用していこうということには、もう40過ぎてしまうと、どうも適応力がない。そうあきらめるか、ある人はもっと屁理屈をつけるんです。だいたい機械を使って教えるなんて、創造性を発達させ、飛躍的な発想を育てるという点から問題があると言われてるじゃあないか。だから、こんなことはもう導入する必要はない。こういうふうに逃げる人もおります。

21世紀は下手すると、そういうニュー・メディアに対する適応力をめぐって、世代格差が非常に大きくなっていく社会かもしれない。そういうことに向けて教育のあり方をこれからどう考えていくか。こういう点から問題を論ずる人があります。

教育の国際化　教育の国際化は、もう先生方の身の回りやわれわれの回りに起きていることであります。海外帰国子女の教育をどう考えていくのか、外国で教育を受けてきた学生達に、やはり普通の学生と同じように、共通一次とか、学力試験をやって大学に入れるというふうなことを、ずっと続けていかなければならないのかどうか。さまざまな面で教育の国際化が論じられております。先程申しました、エコノミック・アニマルと言われないようにするために、文化の伝統の尊重ということを、なによりも大事に考えていかなくてはならない。こういう点から、教育の国際化という視点に立って、教育のあり方を論ずる人もあります。いずれにしても、人によってさまざまであります。先生方お一人お一人、21世紀に向けての教育を考えるという時に、それを捉える視点をお持ちであると思います。

不確実性の時代の人間の生き方　人によって違いますが、ここにほぼ共通して言えることが一つあります。それは高齢化社会、あるいは情報化社会、国際化社会と視点は違いますが、いずれにしても、どんな変化が起きてくるのか、ちっとも予測がつかないことです。最近のバイオテクノロジー、あるいは遺伝子工学の発達というようなことを考えてみましても、どんな変化が起きるのか、予測がつかない。まさに不確実性の時代でございます。

しかし、その中で確かなことが一つあります。21世紀には、あるいは、こ

れからの社会では、われわれ人間のだれもが、一度や二度や三度は、かつて経験し直面したことがない大きな変化に直面していかなければならない。そうした変化に直面しながら、人間として主体的に、その変化に対応して生き抜いていかなければならない。そういう社会になっていくであろうことだけは、どうも確かです。

4. 変化に対して主体的に生きる人間の育成

そういう点から考えますと、これからの我が国の教育のあり方を考える視点として共通に指摘できるのは、どんな変化に直面しても、その変化に主体的に、人間として対応して生き抜いていくことができるような基礎づくりを、学校教育で考えていくということになるのではないか。このことはどうも共通して言えるようです。それでは、どんな変化に直面しても、主体的に対応することができる人間ということを挙げるとすれば、具体的な中身はどういうことになってくるのか。これが次の問題になります。これも人によっていろいろ挙げることができるでしょう。

倉橋理論について　この変化に対する主体的な対応という点から、私なりにすぐ思い起こすことがございます。私の所属する大学に付属幼稚園がございます。日本でも公立の幼稚園として、いちばん早くできた幼稚園として100年以上の歴史を誇る幼稚園であります。下手すると、お茶の水女子大学は知らなくとも、お茶の水幼稚園は知っているという方も随分いらっしゃいます。伝統を誇るわりに中身はどうかということになりますと、ちょっと別の検討が必要になりますけれども、この幼稚園の主事さんを、大正年間から随分長くやっておられた倉橋惣三という先生がおられました。この倉橋さんの幼児教育の考え方は、倉橋理論として、幼児教育関係者の間では、非常によく知られているものでございます。

倉橋さんは、幼児教育の原則として、「自発性の原則」ということを強調されました。子供達の自由な、自発的な学習活動を幼児教育の基本に据えて、したがって幼児達の展開する遊び、自発的な経験や活動を基盤にする。それに下手に干渉しないというふうな点からでしょうか、倉橋さんの幼児教育の理論は自由保育の理論だと、こう言われております。私もまた、いろいろな幼稚園などにうかがいますと、「お茶の水ですね。倉橋理論ですね。自由保育の理論ですね。だからお茶の水幼稚園には、カリキュラムがないそうですね。」と、こういうふうに質問を受けます。へえ、そうなんだろうかと思って、かねてから疑問に思っておりました。ちょうど、一昨年が倉橋惣三生誕100年記念という年に当たりまして、私も頼まれて講演をすることになりましたから、それをきっかけに倉橋さんの書かれたものを一通り全部読み通す機会がございました。

倉橋さんの書かれた論文を全部読んでおります時に、非常に注目される論文に出会いました。大正12年に書かれた論文がございます。大正12年という時点は、ご承知だと思いますが、我が国の社会は大変大きな激動期でございました。変化の社会でございました。今日のように豊かな社会の中での激動期ということではなく、経済的にも恵まれない、そういう中で、我が国の社会は大きな変動期にありました。大正の末期から昭和の初めにかけて、大きな激動期でございました。その大正12年に、倉橋さんは「現代社会はいかなる人間を必要とするのであるか」という問いから発している論文を書かれました。昔の人は大変立派な論文を書かれたものであります。「現代社会はいかなる人間を必要とするのであるか」。論文はそこから書き出しが始まっています。おそらく、先生方も、ここでの研修では、「現代社会はいかなる人間を必要とするのであるか」、その人間の育成に向けてわれわれは何を考えていくべきなのか、という格調高い論議があったんではないでしょうか。倉橋さんは、そういう問いに対して、どういう答えを書かれたか。答えは極めて簡単明瞭であります。激動期の現代社会は、どういう人間を必要とするのか。神経という言葉を使われていますが、「神経が健全で強健な人間を現代社会は何よりも必要としている」。少々のことでへこたれない、神経が健全で強健な人間。これを図太い人間ととられては困りますが、神経が健全で

強健な人間。そして、その次がいい言葉だと思うんですね。「困難に打ち勝って疲れず」、「所信と使命を実行しうる人間」、これを現代社会は必要とするんだ。これが、倉橋さんの極めて簡単明瞭な答えです。「神経が健全で強健な人間」、そして「困難に打ち勝って疲れず、所信と使命を実行しうる人間」。

健全で強健な人間にしていくために倉橋さんが何よりも強調されたのは、大自然の持っている教育の力をフルに活用することである。だから倉橋さんは、幼児教育では、室内でチマチマとしたことをやらせるというふうな、室内保育ということはあまり確信をもたれない。戸外保育だというのです。直接自然に親しませる。自然は美しく、温かで、しかし時には厳しい。その自然に親しみ、その自然に、ある時には挑戦して、そういうことを通じて、「神経が強健で、困難に打ち勝って疲れず」という子供が育成されていくのではないだろうか。

私は見ませんでしたが、最近、中曽根首相がテレビで「自然教育」ということを強調されたそうです。気の早い方は、これだ、これからは自然教育だと考えて、来年の概算要求に向けて、「自然教育の推進」ということで出すと予算がとれるかもしれないということで、取り組みはじめられているところもあるようですが、そんな浮わついた考え方でなくとも、現在、いろんな都道府県で、自然教室が着手されておりまして、本当に子供達にとって「生きた教育」として展開されている例がたくさんございます。そういうところを見ますと、自然の持っている教育の力というものを改めて感じさせられるような場面に随分と出会いました。

先だって、那須甲子少年自然の家へ行きました。子供達の野外教育となりますと、たいてい野外炊飯ですね。親と子供といっしょに、それとボランティアのリーダーが加わって、野外炊飯をやっておりました。昼、到着してすぐに野外炊飯です。飯ごう炊飯じゃないかと思いましたら、この頃は飯ごうはないんですね。飯ごうの使い方もわからないという人が増えてきていますから、下手に飯ごう炊飯をやらせようとしますと、石でかまどを作っても、

あっちにぶっつけ、こっちにぶっつけたりするものですから、すぐ壊れてしまう。それで鍋と釜になっております。そこで薪で御飯を炊くと、そうしたら一緒に見に行った人が、子供の話していることを聞いてびっくりしたんです。「おい、米洗おう」と、こう言うのです。「米を研ぐ」とは、もうこの頃は言わないんだそうですね。あれは、昔は確か「米を研ぐ」と言っていたはずですね。それで当日のメニューは、混ぜ御飯づくりとなりました。ところが、この頃の若いお母さんたちは、混ぜ御飯の作り方が分からない。だから、子供と一緒に野外炊飯をやったんですが、親と子と一緒に、混ぜ御飯の作り方を学習するといった野外教育になっているんですね。そこにボランティアのリーダーで学生が来ていました。この学生がまた、混ぜ御飯の作り方がわからない。そこで教えることができるのは、少年自然の家の専門職員だけが教えることができる。それぐらい、自然の中での教育の機会というのが失われているんだなあと、こういうふうなことを実感させられました。

そういう中で、倉橋さんが自然のもっている教育力をフルに活用すること、「神経が健全で、強健で、困難に打ち勝って疲れない人間にしていく」という点を強調されたことが、まず注目されます。

倉橋さんが二番目に強調されたのは、「小筋肉よりは、大筋肉を働かせる活動を大事にしよう」という考え方でございます。これは体育の先生方の間では、今も使われている言葉のようでございます。小筋肉といいますと、体の部分部分を鍛え、強くしていくことで、そういうことにつながる体育とか運動のことを小筋肉を働かせるという言葉で呼ぶのです。これに対して、体の全体を鍛え、強くしていくような運動とか体育のあり方を、大筋肉を働かせるという。たとえば、遊びを通じて自然に鍛えられ強くなっていくというのは、これは体の全体を働かせていくというような考え方です。

今日、小学校、中学校、特に小学校に多いのですが、校庭に遊具が置かれたり、アスレティックスが作られている学校がございます。この使い方が問題です。学校によっては、遊具とかアスレティックスを、子供達の体のある部分を鍛え強くしていくことにつながるように使われているところもござい

ます。また、ある学校では、遊具を全体の流れという点からうまく配置をして、子供達が楽しみながら、遊びというような中で、結果的に体の全体が鍛えられ強くされていくということにつながるように、しつらえているところもございます。これは考え方であります。こういう点から、倉橋さんは大筋肉を働かせるということを言われたのです。

三番目に、強調されたのは「大製作物への挑戦」ということであります。大きな製作物をつくる。ある物を自分で考えて、それに長期間取り組んで、自分なりに完成させ、やりとげる。こういうことを「大製作物への挑戦」ということで強調されました。できたものは、うまいものもあれば、下手なものもあるでしょう。しかし、自分が自分で意欲的に取り組んで、精魂こめて打ち込んで作り上げたもの、これは、その子なりに「大製作物」なんだということになります。こういう考え方でございます。自分で取り組んで、全力をそこへ傾けていって完成させる。それをやり遂げるまで打ち込む。ここのところを大事にするのが、「大製作物への挑戦」ということにあったように思います。倉橋さんは、えらく「大」という字をつけるのがお好きだったようで、「大自然の教育力」「大筋肉を働かせる」、そして「大製作物への挑戦」とおっしゃっている。やはりスケールが大きいんですね。

そういう考え方に立つと、幼稚園の教育というものは、生活のスケールを大きく考えていかなければならない。だから時間も、40分なら40分、30分なら30分というふうに、細切れに刻み込まない。子供達が精魂傾けて打ち込んで「やったぜ」「できたぜ」という達成の喜びを味わえるようにする。これを思わず声に出すことができるぐらいに、生活のスケールを、時間も含めて大きくしていく。ここでもまた「大」という字をつけられたのですね。

新潟県の朝日新聞社がやっております健康優良学校に行ったことがございます。ここは「ゆとりの時間」を「大作への挑戦」ということで取り組んでいる学校でございました。小規模校でございますが、一人一人の子供が「今学期の私の大作への挑戦」という課題を持つわけですね。ある子供は、国語の時間では読み切れない、長編小説に挑戦しよう。そして、それを全部読み

とおして読書感想文をつくる。それを秋の学芸会に向けて作成する。「今学期の私の大作への挑戦」というものを、ゆとりの時間とか、特別活動の時間だとかに、一学期かけて取り組む。ある子供は、こういう題材で絵を書く。これが「私の大作への挑戦」ということになる。これは絵に対して個性的なものを持っている子供であります。それもやはり秋の文化祭の展示に向けて製作する。ある子供は、「係活動への挑戦」が「私の今学期の大作への挑戦」だということで発表していました。自分は何の係である。この係の仕事を、どのように捉えて、これにどういう取り組みをしていったか、そうして、自分の責任を果たし、仲間達にどう寄与したか。これを報告書にまとめて、これも秋の学芸会で自己表現をする。「私の大作への挑戦」が「係活動への挑戦」である。びっくりしました。子供でなければ、ちょっと出てこない発想ですね。その子にとっては、これは大製作物への挑戦だという。倉橋さんの考え方と共通するものがあります。

自由と精進の原則　そういうことを考えながら、倉橋さんは、次のように結論づけられました。幼児教育の基本は、自由と精進の原則を統一することだ、と。確かに、教育ということを考えていく時、何よりも子供達の自発的な、自分で学習意欲をもって、自発的に取り組むということを大事にしなくてはならない。しかし、同時に、それに打ち込んで挑戦していって、最後までやりとげるという強い意志の力を持つことも大切です。これを精進という言葉で呼んでいいと思います。精進ということは、昔は、教育の原則にかかわるような言葉としてよく使われたものでございます。昔も受験勉強というのはありまして、そして受験勉強に一生懸命になっているところは、漫画化されて書かれておりました。今みたいに豊かな立派な机ではありませんで、ミカン箱の上に新聞紙を貼って、それに向かって勉強しておりました。ハチマキは今も昔も変わらない。ハチマキをして、そして目の前に白い壁。昔はうす汚れた壁が多かったのですが、それに向かって勉強している。その勉強している向こうの方には、「精進」という言葉や「精神一到何事か成らざらん」という言葉が書かれたのが昔でございました。ところがこのごろ「精進」と

いう言葉は、あまり聞かれなくなりました。第一、このごろの学生には、精進が「しょうじん」と読めない学生があって、「しょうじん」て何ですかと聞く。精進料理のことですか、なんて聞く。今は「精進」という字は精進料理ぐらいにしか使われてないんですね。

この最後まで打ち込んで、それに没入していってやりとげる、ここのところを21世紀に向けて推進する。「困難に打ち勝って疲れず」というふうな子供にしていくために、われわれはこれを大事に考えていかなければならないのではないか。ちょっと面倒くさいと、「面倒くさい、やめた」ということで、すぐ放り出していくような幼児が随分と育っています。そういう中で、変化に主体的に対応することができる人間の育成ということを考えてまいりますと、すぐに倉橋さんの主張を思い起こすわけでございます。

変化に主体的に対応できる人間ということを考えますと、第一に強調しなければならないのは、旺盛な学習意欲と、学習に取り組んだらそれを最後までやり通すという強い意志の力を持つことです。これを変化への主体的な対応の能力ということの第一として強調する必要があるように思います。

考える力の育成　私は10年前に私の大学の付属中学校の校長をやっていたことがあったんです。その頃の中学校の目標は、「考える力を育てる」ということでありました。これはどこの中学校でもお立てになっている目標かもしれませんね。付属の先生達は、なんとか考える子供達にしていこうということで一生懸命に努力されたようでありましたが、時々私のところに先生方が訴えてこられます。校長さん、このごろ考える力を育てるという教育は大変難しい。私達は授業の工夫もします。発問の工夫もします。「A君はこう言いましたね。別の考えもあるんじゃないかな。じっくりと考えてみよう」と。今回の教育課程の改善で、「ゆとりのある教育」といわれる。これはまさに、自分なりにじっくりと考えるということに振り向けていけるようなゆとりを、今の教育の中にもたらそうという考え方であって、だから工夫もします。腕を組んで、教壇の上をあっちへ行ったり、こっちへ行ったりしながら、「もう誰か考えがでるんじゃないかな、考えてみよう」という。ところ

がこのごろの子供はそれにのってこないんです。「先生、面倒くさいや。早く正解を教えて」という。また、付属には、こましゃくれたのがいますから、「先生の仕事というのは、正解を教えるのが、先生の仕事なんでしょう」と、まぜっ返すのが出てきて、もう授業になりません。こういうんですね。こういうことだから、一層考える力を育てるということを工夫しなければいかんのでしょうかね。こういうように慰め合いになるようなこともございます。

しかし、考えてみれば、生徒が考えることに待ち切れないと同時に、先生が考えさせることに待ち切れないこともございますね。じっくり考えてみよという。しかし、だいたい１分でも空白の時間があくと、イライラして駄目なんですな。「そう、誰もない。じゃあ」ということで、先生は正解を教えてしまうんですね。あと30秒も待ってくれれば、誰かが何か言うかもしれないのにね。やっぱり先生というのは、月給もらっているせいか、１分も黙っていては、相すまぬという面があるんでしょうかね。したがって、半面では、正解、正解ということで、「考えさせない教育」になっておる。こういうような面がありますね。

これからの教育で大事にしていかなくてはいけないのは、やはり、子供達が、本当に自分で、この課題の解決に取り組んでいくこと、自ら考え、正しく判断するということに打ち込んでいくことです。そして、そのことに取り組んだら、昔、われわれが幾何の勉強をやりました時のように、一晩でも二晩でも、まんじりともせずに寝ないで考える。こう補助線を下ろしても解決できない、こう補助線を下ろしたらどうかな、と考え抜く。学校へ行くと、学校の授業の中で、また考える。そういうように、最後まで解決に、自分の全力を挙げて取り組む、精進する。その強い意志の力、これを大事に考えていかなければならないのではないか。

学習の仕方の習得　第二に、変化に主体的に対応することができる人間の育成ということを学校教育として考えていく時に、考えなければならないのは、学習の仕方を習得させること、学習の仕方を身につけさせるということ

であろうと思います。これも現行の教育課程を実践していただいている中で、いろいろな学校で強調されていることの一つだと思います。これからの学校は、子供達に学習の仕方を身につけさせる場所が学校なんだ、ということですね。これは、言葉を変えて言えば、生涯教育の基礎を身につけさせることです。その生涯学習とか、生涯教育の基礎として大事なのは、学習の仕方をきちんと身につけていることであろうと思います。

基礎・基本の徹底　そういう点から、学習の仕方を身につけるということについて、次の三つの点をとりあえず補足しておかなければならないと思います。学習の仕方を身につけさせるという上で決定的に大事なのは、基礎・基本をきちんと身につけさせることです。どの子にも、ある水準以上のところまで、基礎・基本については、もうみっちりと、時間をかけてでも、徹底的に身につけさせる。これが現行の教育課程、そして一昨年11月の審議経過報告、そして今回の臨教審の第一次答申で、一貫して強調していることであるように思います。これはまさに、生涯学習、あるいは生涯教育の基礎としてかかわりのあることでして、その基礎・基本を徹底的に重視していくことであろうと思います。

それでは、基礎・基本とは何かと、すぐに尋ねられる。これは、今回の教育課程の改善があった時に、先生方の間で大きな関心がもたれたことの一つでしたね。困ったのは指導主事さんたちです。いろいろな学校へ行くと、「基礎・基本とは何ですか」とか、「基礎と基本とはどう違うんですか」と説明を求められる。そうすると答えに困るらしいんですが、次のように説明した人もありました。系統的、段階的にはっきりとしている、そういう時に、これを「基礎」という。こっちは土台ですね。一方の「基本」は、家でいえば柱みたいなもので、系統的・段階的ということでは、はっきりしないけれども、誰もが本質的なものとして身につけなければならないものがある時に、基本というんじゃないでしょうか、と。こういうふうに説明して廻って、ああそれなら解りましたと、こういったような場合もありました。

教育の世界は言葉が非常に氾濫します。たいてい何と言えばよいか分から

ない時には、基礎と基本の間にポツをつけて、それで分かったような気になる場合がありますね。教育課程審議会の前会長をやられました高村象平さんは、経済学者ですから、言葉に大変厳しいんですね。「河野さん、どうして教育の世界というのは、ポツをいつでも付けるのか」と問われる。基礎と基本とはどう違うんです。基礎と言ってもちょっと覆いきれないし、基本と言ってもそれだけでは覆い切れないものが残るから、教育の世界では、そういう時はポツをつけて、基礎・基本といえば、全体を覆いつくして分かったような気になると申し上げたら、「教育学って非常に貧困な学問だねえ」と、こう軽蔑されたことがあります。実際になりますと、そういうことはありますですね。

そういう言葉の定義は置きましても、やはり基礎・基本の徹底ということは、これからの教育でもっともっと深め、強調していかなくてはならんことだろうと思います。

よく知られているアメリカの教育哲学者ホワイトヘッドが、古くて新しい格言を強調しております。「あまりに多くのことを教えることなかれ。しかし、教えることは徹底的に教えろ」と。これは教育における、古くて新しい格言です。我が国のこれまでの教育は、まったくその逆だったのです。あまりにも多くのことを教え過ぎた。そして、教えることは徹底的に教え込まなかった。これが今回教育課程を改善しなくてはならなかった最大の原因であります。これからまた、教育課程審議会がつくられて、教育内容の改訂、学習指導要領の改訂ということが進められていくことになりますと、おそらく、現行の教育課程の改訂で、教える内容を二割から三割がた削減したい、精選したい、ということが出てきましょう。これが願いでしたが、結果的には実現できていません。一割がた削減されていればいいと思うんですね。しかし、これからもう一度、教育課程審議会がつくられて、検討がされるとなりますと、おそらく、今までに比べて四割がたの精選を実現していく、各教科で教えることを大事なものに絞り上げていただければ、生徒のトンチンカンとも思える質問でも、みんなでとり上げて検討していくこともできる。それ

が思いもかけないような意外性をもった、新しい考え方につながり、みんなで創造してきたというようなことにつながるようなことが随分とあります。あまりにも多くのことを１時間の中で教えようとすると、進度をいかにして達成するかということに振り回されますから、教師にとってトンチンカンと思われるような質問が出てきた場合、この前もあんなことをもち出して、授業を10分間も脇道へそらされたのを思い出す。そうすると、「これはいい質問だけれども、ちょっと的はずれだな。後で職員室へ来てくれ。一つ個人的に返事しよう」ということで、折角の意外性をもった質問も、みんなでじっくりと取り上げて検討するというゆとりがない。だからなんとか教える内容を徹底的に精選しなくてはならない。これが願いだったんですが、実現されていませんから、今回のこれからの教育課程の改善では、これを徹底していかなくてはなりません。

その際に大事になってくるのは、先生方の毎日の授業の実践の中で、教育内容の徹底的な精選という点から、教材研究を徹底的にやっていただくことです。教える内容をこれだけのものに絞り上げることができる。そして、それに対しては、学習指導の方向とか形態を多様化し工夫していく。そういうことによって、子供達に、学習の仕方をきちっと身につけさせる。何年何月に、誰が生まれて誰が死んだということも、基礎・基本の一つかもしれませんが、そうでないものが多いですね。しかし、まだ試験に出るということで、そういうものを覚えさせている場合があるわけです。が、そのことが学習の仕方、あるいは生涯学習の基礎とどう結びつくのか、こういうことを十分に検討して、教育内容の精選という点から、教材研究を徹底的に進めていただくこと、それを相互に交流し合う、積み上げる、そういうことの上に立って、教育課程審議会で内容の精選が実現できるということが期待されている。それがこれからの教育課程の改善なのではないかと、そういうふうに思います。

基礎・基本が何かということについては、柳田国男さんの非常に良く知られている答えがあるそうですね。「国民教育の基礎は何か」と問われて、柳

田さんは簡単に答える。「そりゃあ誰でもが新聞を正確に読みとることができる、手紙が書ける、そして計算ができる。この三つが国民教育の基礎だ」と。なるほどそうかもしれませんね。今日、新聞が正しく読みとれるということは、誰にとっても基礎・基本であることは確かなのです。しかし、今日の新聞が正しく読めるための基礎ということになりますと、これは基礎もかなり高度化されているというふうに言わなくてはならない。新聞に書かれていることが事実なのかどうか。そういうことを自分で考え判断する力がなくてはならないし、それを友達や仲間と論じ合いながら、お互いに正しい読みとり方をしていくというふうなことは、もう基礎として確かに必要です。しかし、これは相当高度化されていくことになる。

手紙が書ける。これもなかなか難しいですね。このごろは、第一に、われわれだって、おばあちゃんから書いてきた、水茎の跡美わしい字なんてものは、もう読めやしません。だいいち、この頃の子供は手紙を書くという経験はないんですね。みんな電話ですませてしまいます。これはなかなか難しいんですが、書く力、書いてコミュニケーションができるという力、これは基礎の第二です。

こういうことに加えて、先程申しました、情報化社会への対応という点から、アメリカ等で言われているコンピューター・リタラシー、少なくともニュー・メディア、コンピューターに対してアレルギーをおこさないこと。コンピューター、パソコン、そういうニュー・メディアを自分で使いこなすということができる。こういうものが基礎と基本ということの中に加わってくるのではないか。ご承知のように、文部省でも、ニュー・メディアを学校教育に利用することができるか、できるのであれば、どの程度、どういう限界をもたせて、ニュー・メディアを学校で活用するか、ということについての検討にようやく取り組んだところでございます。

人間の生き方の基礎・基本　そういうことを基礎・基本として考えながら、もう一つ、今回の臨教審で打ち出し、一昨年の11月の臨教審の審議経過報告でも打ち出しました基礎・基本の徹底と、現行の教育課程の改善で強調され

た基礎・基本というところで、いささか違う点が一つある。それは、審議経過報告と臨教審の第一次答申では、基礎・基本ということの中に、基本的生活習慣、あるいは生き方に関わる基礎・基本ということを含めている点でございます。基礎・基本の徹底ということの中で、人間の生き方についての基礎・基本、あるいは基本的生活習慣の確立ということを挙げています。このことに目を向けて、これからの教育内容のあり方を考えていくことが必要ではないでしょうか。学習の仕方を身につけさせるということの中に、生き方についての基礎・基本を身につけさせることが含まれている。このことに注意しなければならないと思うのです。

基本的生活習慣の確立　ご承知だと思いますが、一昨年でしたか、文部省が、小学校の３年生と６年生を対象にして、かなり大がかりな児童の日常生活についての調査を実施いたしました。その調査結果が、新聞等では「箸のもてない子供が半数以上」という形で大きな見出しになりました。これは、もうよく言われていたことです。このごろの子供は、箸が正しく使えない、鉛筆が削れない、卵が割れない、というようなことがいろいろ論じられておりました。それを文部省が改めて、どういう実態になっているのか、調べようとしたわけですね。そしたらやはり言われているとおり、箸の持てない子供が半数以上という結果がでた。箸の正しい使い方というのは厄介なものでして、もうお気づきだと思いますが、私は九州の田舎生まれなものですから、江戸弁は厄介なんですね。微妙なアクセントとか、イントネーションというんですか、それをうるさくいうところがありまして、今、私の子供にも注意されます。「おやじさんのいうはしは、あれは渡る方の〈橋〉であって、食べる方の〈箸〉じゃないぞ」と、こう言われますが、その点では、私はハシが正しく使えないということですかね。しかし、食べることの箸が使えない子供が実際に半数以上いる。先だって、幼稚園の先生方が集まった研究会で、あるベテランの園長さんが、次のようにシンポジウムで発表されました。つまり、基本的生活習慣の確立ということで、箸を例にとってやったんですね。今、河野先生が、箸の使えない子供が半数以上いるということを問題にされ

ました。皆さんの幼稚園ではどうですか。その園長さんは、東京の有名な幼稚園の園長さんですが、その幼稚園でも確かにそうです。箸の使えない子供が半数位はいます、と。「ところで皆さん、箸が使えるというのは、何歳位の課題ですか」と、若い先生方に聞かれたんですね。みんな手を上げて、５歳半とか７歳という。そしたら、その園長さんは「私は、20年前から、ずっと幼稚園の子供の生活の記録をつけているが、その記録によると、箸が正しく使えるというのは、２歳半の課題でした。２歳半で85パーセント箸が使えた。それが５歳になると、オール100パーセント、箸が使えた。それが20年前なんです。これはどうしてでしょう。」結局は、家庭の親の躾、家庭での生活習慣の確立の問題だというのです。しかし、現実には、共働きの家庭が多いとかということで、今、そういう躾が、不十分にしか行なわれていない。だから幼稚園でも、箸が正しく使えるようにという教育をしなくてはならないのかもしれません。こういうふうにおっしゃいました。

その前後に、那須の山で、今度は、若いお母さん達が集まられた時に、シンポジウムがありました。那須の山に有名なお医者さんがおられます。一人だけ開業して、医学博士の学位をもたない人として有名な人です。いろいろな文章を書いておられますね。そのお医者さんは、随分端的におっしゃるんですね。「皆さん、箸のもてない子供が半数以上というのは、那須の山でもそうです」と、こういうんですね。「大体、那須の山でもこのごろは肥満児がでてきてるでしょう。あれはみなさん、子育てが間違っているのではありませんか。昔は那須の山では肥満児なんかいなかった。」野性、大自然の教育ということで、子供たちは野山をかけ巡っていたわけですから、肥満児なんかいなかった。ところが、どうも「このごろ、肥満児が出てきているのは、皆さんの過保護による。だいいち、那須では、このごろペットもすっかり過保護になって、吠えない犬が随分とでてきている。猫は爪をかけないような猫になっている。皆さん、過保護です。皆さん、赤ん坊というのは、粗末なものを食わせたって死ぬものではないんです。」そのお医者さんは、こうおっしゃる。「粗末なものしか食わせないで死んでしまうのは、高齢者なんです。

それをあなた達は間違って、〈おばあちゃん、赤ちゃんにやるんだから、我慢しなさい〉と、こう言っているでしょう。だから過保護になって、肥満児になるんです。」

箸しか持てない子供の問題だってそうです。そのお医者さんの言われたことはなるほどと思いましたが、大体、日本のお母さんのつくる手料理、これは何千年の昔から、箸で食べてはじめて、それらしい味がするようにできているんです。ところが、このごろの皆さんは手料理を作らないでしょう。確かにそうですね。

オアシス運動　そのちょうど同じ頃に、朝日新聞に特集記事がでておりました。これは学校の先生方もそうですが、新聞記者の人達は、いろいろな言葉の頭文字を集めて、つなぎ合せて、ある言葉にするのが大変うまいですね。オアシス運動も、その一つですね。これは挨拶運動なんです。おはようのオ、ありがとうのア、失礼のシ、すみませんのス、こういう基本的な挨拶ができるようにしましょう。これをオアシス運動としてやりましょうという。実にうまいと思うんですね。挨拶という基本的なことができないから、大都会の人間関係は砂漠になっている。そこで挨拶運動、オアシス運動を展開して、みんな地域の人がお互いに「おはようございます」とか「すみません」とか、こういうような挨拶が交せるようになれば、「砂漠変じてオアシスとなる」という発想でしょうかねえ。誰が言いだしたのか知りませんが、実にうまいもんですねえ。

オカアサンハヤスメ　同じように朝日新聞の特集記事では、子供の好きな順に食事を並べていくと、オカアサンハヤスメと、こういうことになるらしいんですね。オムライスからはじまって、カレーライスと、こうつなげて、目玉焼きで結びます。こうなりますと、オカアサンハヤスメ、つまりお母さんの手料理を食べさせるという、お母さんの役割は休んでいてよろしいということになる。

ハハキトク　母親の手料理は、このごろはもっとひどくなったために、ハハキトクになっているそうです。お母さんという仕事・役割が、危篤状態に

陥っている。ハムライス、ハムエッグ、それからキはギョウザですかね。トはなんでしょうかね。それに、クリームシチューとこうくると、みんな箸で食べなくてもいいようなものばかり。それは、共働き、仕事が忙しいということもあるでしょう。だけど、そういうことをしているから、箸の持てない子供が半数以上になった。だから箸の使える子供にしようと思ったら、お母さん達、手作りの料理をつくりなさい、というのが、そのお医者さんの結論でございます。

私は、その時、思いました。なるほど、日本の文化と伝統を維持し、伝達していくということにかかわるような基礎的な生活能力というものがあるだろう。箸が使えることが大切だというのは、人によって違いますね。だが、どんな変化が将来おきるか、21世紀は予測できない。いずれ、これはナイフとフォークの社会になっていくだろう。だから今から箸の使えない子供が半数以上というのを、そんなに仰々しく言うことはないんじゃないかと、こうおっしゃる人もあります。これは見方を変えれば、日本の文化、伝統を維持し発展させていくということにつながるような生活能力の一つとして、箸が使えるということを考えることもできるのではないか。ある健康優良学校へ行って、ゆとりの時間に何が始まるんだろうと思って見ていますと、先生が小学校３年生に、「みなさん、机、腰かけを片付けなさい」と言って、真中を広くあけさせて、節分の日でもないのに、豆をバラッとまき散らしました。家庭からあらかじめ箸をもってこさせておいて、箸のない家庭の子供には学校に備えつけのものを貸し出す。そして、その箸を使って、豆をつかみとる訓練を、ゆとりの時間に１時間かけてやっておる。「ハア、学校はここまでやらなきゃいけなくなっておるんですか。これはもともと家庭の決定的な責任だ」と言うと、そこの校長さんや担任の先生が言われるのは、「そりゃあ理屈としてはわかる。しかし、家庭の決定的な責任に関することだと言ったって、目の前に箸のもてない子供が半数以上いるんですから、これはもう家庭の責任だと逃げてるわけにはいかない」と。そこまでやらなくてはならないという面が学校にはあるんですね。「本当ですね」ということで、頭の

下がる思いもしました。

基本的な生活習慣の確立　基本的生活習慣の中の基礎・基本ということで、明らかにこのごろの子供には、基礎的・基本的な生活能力が身についてないという面があります。これを一つ一つ取りあげていって、これを課題として取り組んでいくということが、一つの課題になってくるのではないか。その中でとりわけ、生き方にかかわるような面がございます。生き方の基礎。文部省の調査でも、はっきりしていることがあります。仲間がけんかしているところを見たら、仲直りさせることがありますかと、こういう質問に対して、答えはどうでしょう。先生方は予測できるでしょうね。達成率何パーセントでしょうか。仲間がけんかしているところを見たら、仲直りさせるというようなことに取り組んでいく子供は、どれ位いるでしょうか。先生方の学校は立派な学校ですから、おそらく子供達も非常に立派なんでしょうね。文部省の調査結果では、全国平均の達成率は5パーセント足らずです。100人中5人位しか、仲間がけんかしているところを見ても、仲直りさせようとしない。子供の仲間がけんかしているところを見ても、〈オレは関わりあいがないや〉という、紋次郎を決めこむ。小学生の頃からですよ。このごろのいじめの問題点の一つは、それだと言われているんです。止めようって子がいなくなった。昔は、いじめていると、「そんなことしちゃダメ」と、こういうふうに、特にできる子なんかが言ったもんですね。ところが、このごろは、頭の良い子は利口ですから、そんなことには関わりあわない。止めようって子がいないのが、このごろの特徴のようです。特に、女子の非行がだんだん多くなって、女子はかえってアオル役をやる。昔は、女子が「あんた達、そんなことやっちゃダメ」と、こういうふうに抑えていたものですが、この頃は、「もっとやらなきゃ、あんたそんなこともできないの」と、こうアオル傾向もでてきてるんですね。基本的生活習慣として、やはり仲間がけんかしているのを見たら仲直りをさせるというようなことは、お互いに大事にしていきたいわけです。

空缶やゴミが落ちていたら、それを拾うことがありますか、という質問が

あります。これも達成率が5パーセント足らずです。一方では、社会教育健全運動という名で、クリーン運動というふうに言われて、空缶やゴミ拾い運動ということが展開されているのに、子供達では、空缶やゴミが落ちてたら、それを拾うということは、100人の中5人位しかいない。こういうような基本的な生活習慣をきちんと身につけないまま、21世紀の社会を子供達が担っていかなくてはならないとしたら、21世紀は暗澹たる社会になってしまうことはもう目に見えている。こういう面から、学習の仕方の基礎・基本ということの中に、生き方についての基礎・基本ということを含ませて、捉えたいと思うわけです。

体験的学習の重視　学習の仕方ということを考える中に、基礎・基本の問題と並んで、もう一つ大事な点は、「体験的学習を重視する」ということであろうかと思います。今回の教育課程の改善で、体験的学習の重要性ということが強調されていることはご承知の通りであります。また、先生方のそれぞれの学校でも、おそらく、体験的学習を推進するというふうな点から、いろんな取り組みがなされていることと思うんです。体験的学習は、今回の教育課程の改善に当たって、中学校と、とりわけ高等学校の普通課程において強調された。ところが一部には、勤労にかかわる体験的学習のことを言うのであろうというふうに誤解されている面もございます。教育課程審議会でいろいろ論議している時、高校の校長先生から怒られたことがあります。勤労にかかわる体験的学習を重視する。「話しはわかる。」こうおっしゃるわけですね。このごろの子供達には、額に汗して働くことの貴さ、額に汗して仕事をすることの喜びを実感し経験することがない。だから正しい意味での勤労観が育たない。これを何とかしなくてはということで、勤労にかかわる体験的学習を重視しようとする考え方はわかる。「が、しかし」とおっしゃる。これは、われわれ日本人の発想の一つの特質ですね。「何々だが、しかし」と必ずバットがつくんですね。話しはわかる。「が、しかし」ということで、ちっとも実践しないというのがありますね。次のようにおっしゃる。話はわかるが、今の普通課程の高校で、畑やたんぼを持てるとお考えかと、こうお

っしゃるわけですね。こちらもきり返さなくてはいけませんから、「あゝ、そうですか。勤労にかかわる体験学習っていうのは、畑やたんぼということに、即なりますか」と、こう聞く。そうしたら、やっぱりなるらしいんですね。だから、畑やたんぼがないから、せいぜい清掃活動を勤労にかかわる体験学習として位置づけることになる。そうしたら、ある委員の方が、次のように主張されて、なる程なと思いました。

必ずしも、畑やたんぼだけではないんじゃないか。今の子供に非常に欠けているのは、先程いいました、自分がこの問題に取り組むんだということです。そうしてこの解決については、それこそ昔の言葉で言えば、心血を注いで取り組む。そして必ずこれを解決させる。一晩も二晩も、補助線の下し方に苦労する。これでできたと思って行ってみたら、それがまちがっていた。なぜ失敗したんだ。失敗した時に、冷汗ぐらいかくだろう。それ位、意欲的に取り組んだらよい。だから、勤労にかかわる体験的学習というのは、自分で、意欲的、積極的に取り組んで、全力を挙げて、それにぶつかっていって、失敗した時に、冷汗をかくぐらいの経験や体験をする。これを体験的学習とよんでよいのではないかと言うのです。そう考えると、体験的学習の展開の場は、なによりも教科の授業の時間にある。授業にいかに体当たりでぶつかっていくかというふうなこと。こういうことを体験的学習というふうに広くとらえることができるのではないか。

引佐高校の場合　もう一つ、体験的学習ということを重視しなくてはならない背景は、次のような例からも考えられると思います。静岡県に、引佐（いなさ）高等学校という、農業課程と工業課程の高校がございます。昔は、ずいぶん有名な高校だったんですが、ご多分にもれず、職業課程がだんだん人気がなくなって、受験生も減ってくる。偏差値からいっても、低い者しか入ってこない。これはいずれ潰れるんじゃないかと、こう思われていた高校です。

ところがここに、周囲の産業構造が大きく変わるという、社会の変化というものがでてまいりました。これからの農業教育ということを考えてみますと、もうこれまでのように、稲をつくったり、麦をつくったりということだ

けでは対応できない。ほとんどがハウス農業である。そして、もう既に、農業高校でも、１本のトマトから１万個とまではいきませんが、そういうものを水栽培でやるというような具合になっている。そうしますと、そういう中で、これからの農業をやっていく上での必要な知識や技術に大きな変化がおきている。パソコン、コンピューター、マイコン、そういうものを使いこなして、いかに水の管理をしていくか。湿度の管理をどうするか。温度管理をどうするか。こういうことに向けての数学的な基礎が非常に大事になっているのです。また、どういう人々は、どういう食物に対する嗜好をもっているか。どういう作物を作れば、それが流通機構にのって売れていくのかと、経営感覚というのが必要になってくる。

工業課程にも、また大きな変化がおきている。機械を使って物を作るという面だけでなく、大事なものとして、デザイン感覚や能力がある。また、この問いに対して新しく産業技術コースというものをつくりました。そしてここは、徹底した体験的学習を基盤にしていきました。実験・実習を主体にした学習指導をするということに徹底していった学校でございます。私はその授業を見せてもらい、生き生きと目を輝かせている生徒をみました。生徒達は勉強しているんですね。パソコン、コンピューター、マイコンを使いこなして、そして水の管理をするためにはどうすればよいか、という問題に取り組んで、いろんな公式をつくったりして、数学的な勉強をしている。生徒の目が輝いている。

いちばん困ったのは先生らしいんですね。マイコン、パソコンを使いこなして、生徒達に教えることができるという先生がいなかった。ちょうど50歳過ぎて、生徒がちっともこなくなった先生がいました。教えることがなくなった。「オレはどうしたらいいんだろう」といって、目がどんよりしていた先生がいた。校長さんが偉かったと思うんですね。その先生に、「あなたはこれから、コンピューター、パソコンを使いこなして、生徒に数学を教えるということをやってくれ。ついては４か月間、長期研修に行ってこい」と、こういうことなんですね。それで、４か月間長期研修に行って、パソコン、コ

ンピューターを使いこなして、子供に教えることができるようになった。すっかり自信をつけて帰ってきた。帰って来た時は、もう目の色が輝いて、授業に行くにしても、服装から違うんですね。意欲的になり、生徒も先生も一体になって、生きた授業になってきた。これは実験・実習を主体にした授業です。ある子供は、普通課程の高校へ行って、黒板とチョークと教科書で数学の勉強をしていたら、おそらくついていけない。授業から落ちこぼれてしまうという生徒だったかもしれないような、そういう生徒が、すっかり目の輝きが違ってきて、数学の勉強はかわるし、好きだということになる。これは体験的学習の一つの成果、効果であります。つまり、子供の個性とか適性ということを考えた場合、黒板と教科書とチョークで、頭で考えていくようなことに向くような子供がいる一方、自分の手を使って物をつくる、機械を組み立てる、機械をこわして構造を調べる、そういうことをすれば、数学的なこともよく分かる。そういうことに向くような子供もいる。これを「手で考えるタイプ」といっていいのかもしれません。手や足や体を通して、ある知識を身につける、というようなことに向く子供、いわゆる体験学習的な子供がいるということだと思うんです。引佐高校の場合は、明らかに、頭だけで考えることには、あまり向かないけれども、体で考える、手で考えるということに向くような子供を伸ばし、開発した例だというふうに思うわけです。先ほど申しました自然教育。あれはみな、この体験学習の一つだというように考えることができようと思うのです。そう考えていきますと、変化に主体的に対応することのできる人間の育成ということを考えていく上で、もう一つ大事なことは、生き方を探求し続ける子供の育成ということであろうと思います。

5. 生涯教育について

一昨年11月に、審議経過報告がでるその前、昭和56年に、同じく中央教育審議会が、「生涯教育について」という答申を出しております。そして、こ

の「生涯教育について」という答申の中で、生涯教育という言葉を、次のように捉えたらどうかという提案をしております。生涯教育というのは、端的に言えば、自己を絶えず高め続けるということでしょう。昨日よりは今日、今日よりは明日というように、自分を絶えず高め続けていくこと、これが生涯教育ということだというふうに定義してよいでしょう。しかし、その場合に、大事なことはもう一つあります。自己を高めるという側面と、他を高めるということ。隣に座っているA君ならA君が、自らを高めていくということについて、それに協力をし手助けをする。そういうことを通して、他を高めるということと結び合わさったような学習をしていくこと。これを生涯教育というふうに呼ぶべきではないか。まさにこの点が、21世紀に主体的に変化に対応できる人間ということを考えていく上に、大事なことだと思います。人を蹴落してまでも自分が高まるというような人間が育成されていくとしたら、21世紀は暗澹たる社会になってしまう。自己を高めながら、同時に他を高める。みんなと共に高まる。こういうことを実現していくのが、まさに生涯教育ということにふさわしいでしょう。これは、言葉をかえていえば、生き方にかかわる問題でございます。

三重県にある小学校がございます。ここでは、ゆとりの時間に、文化と伝統の尊重ということではありませんが、手作りのものを作らせるという点から、草履作り、わらじ作り、むしろの織り方というような、地域の産業あるいは文化を学習させることをやっております。

こんなことをやろうとしますと、先生がだめなんです。特に若い先生方の中には、草履なんか作ったことがないという先生がいっぱいいらっしゃいます。教員養成でまさか草履のつくり方なんていうのを教えるわけがありません。その地域に社会教育の高齢者学級がありまして、そこで村の歴史を調べるとか、俳句をつくるとか、自分を高めるということについて勉強している高齢者の学級がございます。その高齢者の学級の人たちが、そのゆとりの時間になりますと、学校へボランティアとしてやってきて、先生といっしょに子供達に、草履のつくり方、わらじの作り方を教えている。こういうことを

やっている学校がございます。ここは長寿村として知られておりまして、60人位の高齢者学級の人達が来ておられましたが、その中の20人位は90歳近くというような長寿村なんですね。もう目が輝いて曾孫に当たるような子供達に一生懸命教える。背骨もしゃきっとして、あとで高齢者の方達に話を聞きますと、「私達はこういう活動に参加して、非常に生きがいを感じているんです」と、言うのです。そうでしょう。自分のもっている貴重な経験や体験を誰かと分かち合いたい。特に次の世代に伝達している。これはもう喜びです。「教育は喜びだ」といわれるのはここにある。自分のもっている貴重な経験や体験を、仲間と分かち合い、次の世代へと伝えていく。これが教育の喜びです。だから生きがいになる。目が輝いておりましたから、あの長寿村の人達は、ああいうボランティア活動を充実させることによって、もっともっと長生きされていくのではないでしょうか。生きがいがある。その生きがいの元は、自己を高めるということと、他を高めるということを結び合わせた取り組みをしておられるというところにあるのではないかと、そう思います。

この旺盛な学習意欲と意志の力をもった子供。学習の仕方を、基礎・基本を含めて、きちんと身につけている子供。体験的学習を通して、自分の個性を伸ばしている子供であると同時に、自己を高めることと他を高めることを統合していくような、結び合わせていくような学習をしている子供達が、21世紀に変化に主体的に対応していくことのできる人間であるということができるのではないか。

自己教育力　審議経過報告では、この三つを包み込んだ意味内容の言葉として、「自己教育力」という言葉を使ったわけでございます。今日、いろんな学校で、自己教育力の育成ということを、教育目標、あるいは学校の経営方針として取り組んでおられる学校がございます。この自己教育力をどう捉えるか、これは人によってそれぞれ違いがあるようでございますが、審議経過報告では、この三つを包み込んだ意味内容として使っているということが大事なところだと思うのです。先生方にお考えいただく上での一つの手掛り

としていただくという意味で、これまで話しをしてまいりました。

まとめ

最後に、まとめをしなければなりませんが、次のようなことでまとめにかえさせていただきたいと思います。アメリカの精神分析学者で、グラッサーという人がおります。グラッサーは、少し前に、「落伍者のいない学校」という本を書きました。わが国の現在の問題意識で申しますと、落ちこぼれ、落ちこぼしのない学校ということになりましょうか。落伍者のいない学校にしていく上で、決定的に大事なことが２つあるというふうに、グラッサーは申します。その第一は、一人一人の子供に「自己価値観」をもたせることだ、というのです。この自己価値観を一人一人の子供が持つということはどんなことかというと、グラッサーによれば、自分は隣に座っているＡ君とは違った自分なりの何物かをもっている。そういう存在である。言葉を変えていえば、自分なりに、個性的な何物かをもった存在が自分なんだ。そういう、自分なりに個性的な何物かをもった者としての存在が、個性的なものを通して、親にとっても意味のある存在になっているんだ。学級の仲間にとっても、自分なりの個性的なものを通して、学級集団に寄与している。そういう仲間達は、そのことを通して、自分の存在を認めている。そういう存在は、また教師にとっても、意味のある存在になっているんだ、と。そういうことを実感することが自己価値観をもつことだというのです。このことは、もう先生方が十分学級経営の中で、あるいは教科の授業の中で、特別活動の中で、視点として、もっていらっしゃる点だと思います。しかし、グラッサーがここで改めて、自分なりにもっている個性的な何物かを通しての自分の存在ということで、自己値価観だとか、自己存在観だとか、そういうことを強調している点が、注目されなければならないと思うんです。

もう一つ、グラッサーが落伍者のいない学校にしていく上で決定的に大事だとして挙げているのは、愛ということであります。教育は、愛に始まって

愛に帰着するといわれております。ここがまた、日本の言葉の微妙で美しいところです。ことほどさように大事なことなんだから、日本語では、アイウエオは「あい」ということで始まっているといわれる。愛を強調されたいある有名な先生は、「おい、君もこの頃、教育学辞典を編集しているようだけれども、君の編集する教育学辞典で、愛がいちばんはじめにきてなかったら、これは教育学辞典と言えないぞ」と、こういうふうにおっしゃいました。私の編集した教育学辞典は、幸いなことに、愛がいちばんトップにきておりました。もっとも、教育学辞典はそうですが、広辞苑なんかになりますと、そうはいきませんね。まだ、アというのがありますからね。悪知恵の働く人がいて、自分の会社をつくりますのに、「あ」という名前の会社にしたのがいるんだそうです。そういう名前をつけておけば、会社一覧なんかでも、トップにくるのはまちがいないですから。これはちょっとひっかかるんだそうですね。そこで名前をつけかえさせられたということです。独占禁止法じゃないでしょうが、そういうことがあるようです。まあ、ことほどさように、教育において、愛は全てであります。がしかし、グラッサーはその愛という言葉を使って、次のように言います。学校教育に限定していうならば、愛ということは、助け合うということだし、協同するということだ、と。それはそうでしょう。隣に座っているA君が、自分なりに自己価値観をもつことができるというようにしたい。あるいは、自分も自己価値観をもつようにしたい。そのためには、隣に座っているA君が、A君なりの個性的な何物かを通して、自己価値観をもつことを助けてやらなければならない。そういう場にしなくては、自分だって自己価値観をもつことはできないという意味で、助け合うということ、協同するということが大切となります。このように、この自己価値観をもたせることと愛の心を育てること、これを落伍者のない学校にしていくことの決定的に大事な二つの条件なんだ。こういうふうに指摘していることが注目されます。私なりに申し上げれば、この自己価値観を一人一人の子供にもたせる。そして、愛の心を育てるということは、とりもなおさず、自己を高めることと他を高めること、これを統合的に結び合わせて

いくということになるだろうし、これが自己教育力をもった人間の育成ということになってくるのではないかと、そのように捉えたいと思います。

（本稿は、1985年8月6日に、モラロジー研究所主催、文部省後援の「第22回教育者研究会」で、河野重男教授が講演された内容です。河野教授の承諾を得て、モラロジー研究所研究部でまとめたもので、文責は研究部にあります。）

Education for the Twenty-first Century
—Raising One's Ability for Self-education—

Shigeo Kohno

In the 1960's the general feature of Japanese education was grasped as an "Educational Explosion," which was also common in such western countries as the U.S.A., Holland, Canada, France, Belgium, Austria, Germany, Denmark, Sweden, and so forth.

In the 1970's education was obliged to be changed due to the first and second oil-shocks. Additionally, it began to be influenced by the development of high technology, information revolution, and internationalization.

The aim of contemporary education is apparently changing from "quantity" to "quality," which tasks are "respect for individuality," "importance of basis of learning," "raising the abilities of creativity, thought and expression," "expansion of chance selection," "humanization of educational milieu," "establishment of life-long learning system," "response to internationalization of education" and "response to information revolution." In short, the main task is to raise the ability of self-education.